



# Art of Space 一輪の花の余白と連続

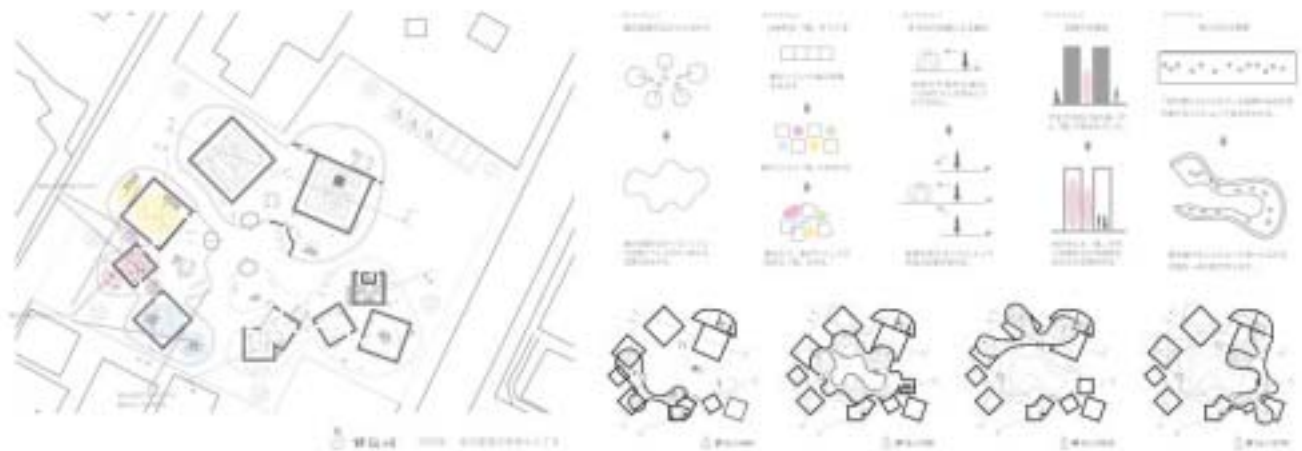


森下 雅裕 (もりした まさひろ)  
千葉工業大学 工学部 デザイン科学科

特別審査員賞



一輪の花の余白と連続



日本文化は「間と余白」の文化であり受け手に考える余地をあたえる。空間、空気を演出することでさらに湧き出るものを作りそれらをうまく利用している。

一輪挿しは、多くは語らずに一輪の花でその周りの空間、空気を彩り演出をする。また花束のように沢山の花を連続させて空間を演出することもある。これを現代社会に置き換えると一輪挿しは落語や和室、日本画などの伝統あるもの、花束は日本都市の新しいものを詰め込み、余白を残さない複雑な都市に置き換えられる。しかしこれらの二つは海外から見ると、美意識から生まれた「間と余白の日本」と、新しいものを取り入れ「複雑になる日本」どちらも現代の日本文化である。この両者の影響し合い高め合うことを美術館設計に組み込む。

### 講評

「日本文化は間と余白の文化」と定義し、日本ならではの美術館建築のあり方を導こうとした意欲作である。平面的及び断面的に展開される建築要素が相互に干渉しあい、その関係性のなかに生まれる「間合い」が、作品と観覧者との複雑な関係性をつくりだし、作品の持つ本質を建築で引き出すことができると定義している。前日突如襲った東北関東大震災の影響で交通機関が止まり、公開プレゼンテーションの機会は得られなかったが、完成度の高い模型からは、美術作品が整然と並べられ1対1で対峙するといった今までのハコモノ美術館とはまったく異なる視点を有していることを読み取ることができた。まるで街を散策していて、琴線に触れる作品との「出会い」が、突然訪れるかのような「面白さ」ある空間で、かつ日本ならではの空間性を示唆している点が高く評価された。(審査委員：関谷 和則)